

ロンドン日本人学校における英国の現地校交流と 英会話学習の連携と実践

前ロンドン日本人学校 教諭

北海道茅部郡森町立さわら小学校 教諭 山崎 誠

キーワード：現地校交流、総合的な学習の時間、英会話、教科

1. はじめに

ロンドン日本人学校の前身は、日本クラブが主催した「日本語会」である。児童生徒20名、教諭4名であったが、その後生徒数が増加し「補習授業校」になる。1976年に日本クラブ運営の「日本人学校有限会社」により小学部児童54名、中学部生徒25名の小中併設校として「ロンドン日本人学校」が設立された。翌1977年には小学部児童154名、中学部生徒69名の計223名に増加し、カムデンに小・中合同の校舎を移転した。1987年には、現在地のウェストロンドンのイーリング区アクトンへと校舎を移転し、現在に至る。現在の校舎は、1900年にハバダッシュャーズ・スクールの女学校として建てられ、その後ローマ・カトリック系の公立、カーディナルニューマンハイスクールとして使用されていた、約100年の歴史をもつ総赤レンガ造りの重厚感あふれる建物である。児童生徒数は、一時は964名まで増加したが、現在は337名である。

本校の教育目標と教育の特色としては、①進んで学ぶ児童生徒「ロンドン在住の利点を生かし、国際性とコミュニケーション能力を高めると共に、日本への理解を深めることができる」②強く、たくましい児童生徒「何事にも落ち着いて、粘り強くチャレンジすることができる」③優しく助け合う児童生徒「学校に誇りをもち、明るく楽しい学校生活をおくることができる」が挙げられる。特色ある教育活動として、「ロンドンタイム（総合的な学習の時間）」、「現地校交流」、「英会話授業（小学部週3時間）」、「修学旅行（小学部6年スコットランド、中学部2年北ウェールズ）」、「自然体験教室（小学部5年イングランド西部）」、「写生大会（タワーブリッジ等）」、「生活科見学・社会科見学（全学年：校外現地施設等）」、「中学部1年生英語サポートクラス」が挙げられる。



現アクトン校舎

2. 本校の学校教育目標と研究主題

本校では、開校以来「たくましいロン日っ子、ロン日生」という学校教育目標のもとで国際理解教育を推進してきた。また、上記特色ある教育活動にもあるように、「習熟度別の英会話授業」の実施や、英国にあるという条件を生かした「現地小中学校やフレンチ校、ジャーマン校、スパニッシュ校との交流学习活動」にも積極的に取り組んできている。こうした取組の現状を見直す中で、「交流学习における英会話学習成果の活用不足」「英語での会話が成り立つための英会話の練習不足」等の課題が明らかになった。これらの課題をおさえ、英語教育活動への取組の改善と充実を図るために、改めて英国にある在外教育施設としての特色を十分に生かすとともに、児童生徒の実態や保護者の願いやニーズにも即した研究を目指すこととした。

研究主題として「外国語を中心とした実践的コミュニケーション能力の育成」を設定し、現地校との交流学习活動を生かした実践的コミュニケーション能力の向上を目指し、英会話学習、現地校交流、そしてそれを結ぶ総合的な学習の時間（ロンドンタイム）の効果的な在り方を探究した。本研究の目指すところは、文部科学省が国際理解教育として定義している「主体的に行動するために必要と考えられる資質・能力の基礎を育成することを

目的とした教育活動の実践」であり、これらの活動を通して、「異文化と共有できる資質や能力」「自己の確立」「コミュニケーション能力」を育むことにより、国際社会で活躍できるたくましい人材の育成である。

3. 研究内容

(1) 国際化対応への視点

- ① 「異文化と共生できる資質や能力」
 - ・ 異文化を理解し、尊重することができること
 - ・ 異なる文化をもった人々とも共生しようとするすることができること
- ② 「自己の確立」
 - ・ 日本人としての意識をもつことができること
- ③ 「コミュニケーション能力」
 - ・ 英語を聞いて話し手の意向などを理解することができること
 - ・ 英語をもちいて自分の考えなどを話すことができること

(2) 英会話学習〈習得型学習〉

① 現地校交流で使用する英会話集の作成

英会話学習の年間指導計画に、予め現地校交流に向けた準備の時間を設定し、実際に使用する英会話の習得を目指すこととする。具体的には、英会話講師とのミーティングを行い、各学年の交流活動に即した表現を実際の授業の中で活用し指導する。

② ICT (Information Communication Technology) 機器の活用

現地校交流にて生かせる会話の習得を目指す英会話学習の充実のために、英会話講師に英会話フレーズを動画に撮影させてもらい、PCやタブレット端末で児童が常時教室で見て確かめられるような環境を整えるなど、ICT機器を整備し積極的に活用する。

(3) 現地校〈探究型学習〉

① 系統性のある交流計画の作成と実践

現地校交流の素材となりうる内容を元に、各学年の内容を検討し、交流内容が系統性をもつものとなるように活動計画を整理する。

② 各教科の学習を基にした交流活動計画の精選

活動内容は、児童生徒が教科の中で学習するものであるとともに、交流相手に伝えたいと思う内容を選択する。また、交流当日に児童生徒が取り組む活動は、交流校の児童生徒と共同で行う活動を組み込み、コミュニケーションを図る必然性が出る場を意図的に設定する。

(4) 総合的な学習の時間〈活用型授業〉

○実践的コミュニケーション能力育成の時間の開発

これまでの、総合的な学習の時間における現地校交流に向けての取組は、ダンスや歌の練習が主であった。そこで、総合的な学習の時間（低学年：学校の行事）を英会話学習（習得型学習）と現地校交流（探究型学習）を結び付ける実践的コミュニケーション育成の時間と位置付け、学習内容や学習活動の開発を行う。

(5) 小学部3年英会話習熟度別クラスの学習目標

A class	相手の考えを聞くと共に、自分の考えを述べ、会話を続けることができる。
B class	相手の考えを聞くと共に、自分の考えを述べ、会話を続けることができる。
C class	自分の考えを述べるができる。
D class	自分の考えを述べるができる。
E1 class	覚えた英語表現を言うことができる。
E2 class	覚えた英語表現を言うことができる。

(6) タブレット端末の活用方法

・「やさしさ発見」の交流活動において、カードの代わりにタブレットを使用。福祉施設の写真をタブレット端末で見せながら、自分たちの調べた「町のやさしさ」について紹介する。

4. 授業実践小学部3年生（モルシャム校来校交流）

(1) 現地校交流に向けての学習活動計画

	取り扱う教科・領域	主な学習活動
	総合的な学習の時間〈活用型学習〉 「やさしさ発見」(福祉) 「ブラインドウォーキング体験」	<ul style="list-style-type: none"> 町探検をして、町の中にあるバリアフリー、ユニバーサルデザインのものを探す。 町探検で発見した「〇〇にやさしいもの」(福祉施設)やその他のバリアフリー、ユニバーサルデザインのものを選び、タブレット端末にまとめる。 日常生活の中で、体に障害をもつ人にとって不便なことは何か考える。
	総合的な学習の時間〈活用型学習〉 「自己紹介の練習」	<ul style="list-style-type: none"> 現地校交流で行う活動1について知る。 「うそ発見ゲーム」で使うカードを作成する。
	英会話合同授業〈習得型学習〉 「方向を表す言葉」 「町のやさしさ紹介」	<ul style="list-style-type: none"> ブラインドウォーキングをする時に、交流児童に伝える方向を表す言葉、及び歩く時の注意を促す言葉を知る。 「やさしさ紹介カード」で使う基本構文や単語を知る。 「やさしさ紹介カード」の練習をする。
A組	総合的な学習の時間〈活用型学習〉 「英語で言ってみよう」	<ul style="list-style-type: none"> グループを作り、活動2と活動3を行う。
B組	総合的な学習の時間〈活用型学習〉 「交流で使用する英語表現を練習しよう」	<ul style="list-style-type: none"> グループ毎に「町のやさしさ紹介」をする。 ペアになってブラインドウォーキングをする。
	総合的な学習の時間〈活用型学習〉 「挨拶・自己紹介の練習」	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶や活動1の練習をする。 活動2・3の発表の仕方を練習する。
	総合的な学習の時間〈活用型学習〉 「英語で言ってみよう」	<ul style="list-style-type: none"> 活動2と活動3をやってみる。 交流の時に、さらに必要な表現を考え、出し合う。
	総合的な学習の時間〈活用型学習〉	<ul style="list-style-type: none"> 前時を振り返りながら、すべての活動のリハーサルをする。
	現地校〈探究型学習〉 「モルシャム校との交流」	<ul style="list-style-type: none"> 「うそ発見カード」を使って自己紹介をする。 「町のやさしさ」紹介、「ブラインドウォーキング」をする。
	総合的な学習の時間「交流の振り返り」	<ul style="list-style-type: none"> 現地校交流に向けての取組と、当日を振り返る。

(4) 現地校交流当日の活動

① 1・2校時「歓迎の言葉、活動1（自己紹介ゲーム）」

モルシャム校児童が予定通りバスで来校。体育館に誘導し「自己紹介カード」を書いてもらった。「歓迎の会」でお互いに挨拶をした後、活動1（アイスブレイキング）自己紹介ゲームをして、少しずつ打ち解けていった。

② 3・4校時「活動2（町のやさしさ紹介）活動3（ブラインドウォーキング〇×クイズ）」

児童による全体説明後、各グループに分かれ、「町のやさしさ（7つ）」についてタブレット端末を使用して紹介した。英会話授業で英会話講師を相手にシュミレーションしたことを生かして発表することができていた。

ペアになったパートナーに目隠しをしてブラインドウォークを行った。どのペアも上手にポイントへ誘導することができていた。各ポイント（7つ）のクイズを一緒に考え、答えを導き出していた。英会話フレーズを活用してヒントを出すなど、積極的に英語でコミュニケーションをとる姿が多く見られた。

③ 昼食・共同清掃活動

家庭科室にて一緒にグループを作り食事をした。ここでは、好きなスポーツや遊び、アニメやサッカー選手の話などで会話が盛り上がり、すっかり打ち解けた様子であった。その後、体育館でボール回しゲームなどを行った後、それぞれに交流校の児童と一緒に過ごした。ドッジボールやサッカー、遊具施設で楽しく遊ぶ姿が見られた。

英国の児童は清掃活動を行う習慣がなく、交流校の希望で一緒に清掃も行った。モップを使った「掃き掃除」や雑巾を使った「拭き掃除」を行う児童たちの姿を見て、現地校の教諭は皆、日本の文化に感心していた。予定外の活動であったが、よい異文化交流ができたため、次年度の計画に取り入れる事とした。

④ 5校時「日本の文化交流（折り紙体験）・お別れの会」

新聞紙で折り紙の「かぶと」を作成した。かぶとが完成したら、千代紙で他の作品作りにも挑戦してもらった。紙飛行機を作って飛ばしたり、鶴を折ったりした。中でも一番人気だったのが「ピョンピョンがえる」であった。モルシャム校は日本文化の学習を取り入れていることもあり、現地校の子たちはとても喜んで活動していた。最後は、別れを惜しみながらも、次回モルシャム校へ訪問する時の再会を楽しみにバスを見送る子どもたちであった。

5. 研究の成果と課題

現地校交流における事前学習と英会話授業の連携を行い、より効果的な英会話学習を計画し展開するために、英語表現習得の時間を英会話学習の年間指導計画の中に位置づけた。小学部では交流前4時間を、交流に向けた英会話学習として設定し、当日の活動場面で必要な英語表現を学ぶ時間とした。これにより、計画的に連携が実施され、英会話学習の指導をより有機的に行うことができたと思われる。さらに、定期的に行われている英会話ミーティングに学年教諭が参加し、当日の活動内容を説明したり、英会話フレーズの修正や動画の撮影協力を依頼したりすることで、必要な英語表現や活動内容について共有することができた。

さらに、現地校交流に向けた英会話学習の4時間目を学年教諭と英会話講師との共同授業と位置づけ、英会話講師を交流校の児童生徒に見立てたりハーサルを行うことで、より実践的な習得を目的として授業を展開することができた。英会話講師と学年団の連携が強化され、全教職員が共通の学習活動対するイメージをもって交流への取組を行うことができ、大きな成果であったと言える。

今後の課題としては、自分の主張を述べるだけでなく、相手の話を聞き取り、お互いの考えを練り上げていくといった双方向のコミュニケーションが必要であり、実践的コミュニケーション能力のさらなる伸長を目指すためには、「聞くこと」の力を伸ばす授業内容の工夫・改善が求められる。それには、英語を聞く機会・英語に触れる機会を多くすることからも、ICT機器の更なる活用や週3回の英語学習の時間と現地校交流の時間をより連携していき、現地校の児童生徒と日常会話がスムーズにできるようになることが求められるだろう。今後もロンドン日本人学校が、外国語を中心とした実践的コミュニケーション能力の育成を達成し、国際社会で活躍できるたくましい人材の育成に大きく寄与することを期待して、成果と課題のまとめとしたい。

6. 終わりに

グローバル化される世界の中で、日本の児童生徒は今後国際人として生きていかなければならない。それは、子どもたちの育つ地域や生活環境がどうあれ、異文化理解や国際理解は必要なものであると考える。英語はそのコミュニケーションをはかるツールでしかないが、とても重要な言語であることを自覚することができた3年間であった。「なぜ英語を勉強するのか」と子どもたちに問う時、「友だちを作りたい」「相手の言葉を覚えて話ができるようになりたい」と、素直で率直な声が返ってくる。現地校交流を通して、相手校の子どもたちも同じことを考えていることを知ることができた。「世界中に友だちを作りたい。その国のことが知りたい。話がしたい。」そんな動機付けから始まる国際理解教育、英語教育は素敵だ。英国で生活して、英国の人々の優しさにとっても多く触れることができた。ドアを次に通る人のために手で押さえておいてあげること。地下鉄の階段では、ベビーカーを当たり前のように運ぶのを手伝ってくれること。子どもや高齢者にはバスの席を自然に譲っている若者たちがいること。これらの習慣・文化は日本の子どもたちにも伝えていきたい。ロンドン日本人学校に赴任して、英語活動や英会話の授業との連携、現地校交流に向けての英会話講師との共同授業は、今後、日本の学校でのALT（Assistant Language Teacher）との連携や2020年度から小学校3年生で実施される英語活動を見据えた、貴重な経験であった。これからの日本の教育活動でも役立てていきたいと考えている。